

臨時写真科に次いで大正十二年には小西写真専門学校も設立され、従来の写真師やアマチュア写真家とは一線を画するプロフェッショナルな写真家が誕生する基盤ができて行った。

② サンフランシスコ万国博覧会

一九一五年（大正四年）の二月二十日から十二月四日までサンフランシスコで万国博覧会が開催された。本校の出品については「明治四十四年 博覧会 其他諸会 出品書類庶務掛」に記録があるが、既出「東京美術学校近事」の記事（582頁）と重複する部分が多い。ただし、前者によれば、出品物のうち「日本画成績貼込額面式個」は望月尚、井上恒也、松崎孝忠、山崎善次郎、佐藤直己、植松俊郎、田上尚之、太田義一らの作品であり、「西洋画成績額面四個」（自画像像式、風景『奈良、港』式）については、はじめ裸体画三点を出品する予定だったのを変更して風景画とし、実際には山脇信徳の「停車場の朝」と中野營三の「春の岬」が出品されたことがわかる。「図案成績貼込額面式個」は林威三、藤岡茂男、浅野廉、小倉淳らの作であった。また、博覧会終了後「日本画成績貼込額面式個」、「図案成績貼込額面式個」および「铸造青銅鳳文香炉」、「铸造渦紋花瓶」はカリフォルニア大学へ寄贈された。この博覧会に際し、久米桂一郎は本校を休職し、博覧会協会サンフランシスコ万国博覧会出品部主幹として大正四年一月十六日より翌五年一月二十五日の間渡米した。

③ 川合玉堂起用

大正四年五月十九日、川合玉堂が教授に任命された。玉堂は本名

を芳三郎といい、明治六年愛知県栗原郡外割田村生まれ。はじめ京都で望月玉泉、幸野樸嶺に師事し、二十九年よりは橋本雅邦に学んだ。四十年文展開設以来審査委員をつとめ、文展に出品を続けた。それらは日本の四季おりおりの自然の美を描き表わそうとしたもので、その近代的なものの見方と平明温雅の画趣、安定した技術が一般の支持を得ていた。

玉堂の起用は川端玉章の辞任により後任問題が起こったときから囁かれていた。中には関如来のように、次のような積極的な提案をする人もあった。

△栖鳳は天才にて候。天才は教授としては餘りに勿體無く候。看板に名をのみ求めんとするならば兎も角、眞に子弟教育の任に當らしめんとするには、天才は餘りに自己の適所を選び過るものにて候。

△それよりは能才、俊才を擧ぐるの優れるを信ずるものにて候。而もこれとても多くは候はず。たゞ川合玉堂こそ、美術學校教授としては、最も適任者と信じ候

△玉堂は冷靜にして又己を持する極めて謹嚴なる、其作品之を證して餘り有り候。放心に流れ易き美術學生を教育するに於て間然する所なきを信ずる者にて候。

△其の家塾に於ける制規の如きは整然として、純乎たる一私費の體を爲せる、當時稀に見る所にて候。宜なる哉、其の門を出でたる、山内多門、井澤蘇水、長野草風近くは池田蕉園の如き皆年次の淺きに關はらず、各一別才として稱せらるゝ、蓋し其の性の趨